
『朱色優陽 アケイロユウヒ 』 閑話

想隆 泰氣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『朱色優陽 アケイロユウヒ』 閑話

【Zコード】

N7096M

【作者名】

想隆 泰氣

【あらすじ】

『朱色優陽 アケイロユウヒ』に登場するサブキャラクター達による独白記。主人公以外の視点から紡がれるショートショート。

『三日月ノナナイキモチ』（前書き）

神山美月による独白記。

『朱色優陽 アケイロコウヒ』 1読み後にお読み頂ければ幸いで
す。

『三日月』

そのヒトが何を考えているのかなんて、見た目だけでは分からない。

何故あの子は、あんな怖いヒトと仲良くしているのだから?

ずっと、それが疑問だった。

あんなにも明るくて、楽しくて、誰にでも優しくて、友達だって一杯いて、私みたいな、何の取り柄もないつまらない女の子にだって、素敵な言葉をかけてくれるような優しい子なのに……何でなの?

容姿も、立ち居振る舞いも、声だって可愛いから、当然、男の子にも人気がある。なのに何で、あのヒトなんだろう? よりにもよつて、あの 境守起陽なんだろう。

悪い話しか聞かない。恐ろしい話しか聞かない。最初にあのヒトを見たのだって……思い出すのも嫌なくらい、凄惨な現場だった。

入学して間もなくの頃、あのヒトは、当時の三年生に大げがを負わせたことがある。どちらに非があったのかなんて知らない。ただ、三年生は頭から血を流して倒れ、あのヒトは、それをつまらなそうに見下ろしていた。

それはきっと、私だけじゃなくて、あの場にいた多くの生徒達の記憶に深く刻まれたと思う。忘れられない 恐怖の記憶として。

……思えば、あの子を眼にしたのも、あの時だった。

つまりなそこにするあのヒトの側で、まるで恐れることもなく、その非道な行いを齎める女生徒。駆けつけた先生達があのヒトを連

れて行く時も、絶対に傍らを離れようとしなかつたあの子。

それが、朝日奈ひなとと言う女の子だった。

今思えば、あの時の女の子と友達になつてゐるなんて、不思議な感じがする。あの時は、まるで遠い世界のヒトのように感じていたから。

……だけど、ひなちゃんと友達になるよりも、よほど信じられないことが、最近、起きた。

それは

「つ 境守君つ……！」

眼の前に見えた背中に、声をかける。未だに、少し声がうわずつてしまつ。

「？ ……ああ、神山か。よっ」

振り向きながら言つて、少し皮肉げな笑みを浮かべる彼。

信じられないことはつまり、彼 境守起陽君とまで、お知り合いになつてしまつたと言つこと。

……いえ、なつてしまつたと言つのは語弊があるのかも知れなけれど。でも、彼のことを未だ計り兼ねていると言つのは本當だった。

「今から病院か？ お前もマメな奴だな なんて、頼んだ俺が言う台詞じゃねえか」

言つて、境守君は自嘲的に笑う。

そうなのだ。私は彼に請われてからと言つもの、週に三回は、放課後に病院へ顔を出している。

大変と言えば大変だけれど、子供達が喜んでくれるのは嬉しい。何より、こんな自分でも、誰かの役に立てると言つことが嬉しかった。

少しだけ優しい気持ちになつて、私も笑みを浮かべる。

「境守君だつて、ほほ毎口通つてるんでしょう？ ひなちゃんに聞

いたよ？」

「あー……まー、俺の場合は、あれだ。毎日顔を出さないと、へそを曲げるやつかいな奴がいるんでな」

呆れたように、嘆息する彼。でも、嫌がつては見えたかった。

それを微笑ましく思つ反面 少し、羨ましくなる。

境守君やひなちゃんには、そのヒトが側にいるだけで満足だと言うヒトがいる。それは、それだけの魅力が二人に備わっているからなのだと思う。

じゃあ、私は……？

「…………すごいね、境守君は」

「無意識に、呟いていた。

「私は……誰かに求められたことなんてない……求める自信も、ない 私には……何もないから……」

そんな辛氣臭い私の言葉に、境守君は押し黙つた。

「…………」「めんなさいっ…………！ 変なこと言つちやつて
つ…………」

すぐに失言だったことに気がついて、私は慌てて顔を上げる。冷たい眼で見られることくらいは覚悟していた けれど、彼は、けしてそんな眼をしなかつた。

「…………はつ、何言つてんだか」

そう言つた彼の眼は呆れたような色をしていただけれど、どこか暖かい色もしていた。

「何にもねえ奴に、助け求めたりするわけねえだろ」「で、でもつ、私つ、ひなちゃんみたいに可愛くないし、運動だつてできないし、勉強も得意つてわけじゃないしつ……」

反射的に、私は首を振つていた。

境守君は、そんな私に一つ嘆息して、続けた。

「……ひなたが可愛いとか、神山が可愛いとかは別として、だんなの、関係ねえだろ。可愛いなかろうと、運動できなかろうと、勉強できなかろうと、お前にはお前にしかできねえことがあるだろ」

それはつまり、私が病院へと通う理由。

「つ……でも……」

それでも、不安は拭えない。私は本当に、誰かに求められる価値のある人間なのだろうか？　そこにいて良い人間なのだろうか？

「……あんな。何を迷ってるのか知らねえけど、事実は一つだけだろ。俺は、俺にはできないことをお前に頼んだ。それは、まあ、つまり……何だ。神山的に言うと　お前を『求めた』……つて、ことなんだろ。……何か、いやらしい言い方だが

「いやらしい？　……つて、やだつ！　境守君たらつ、私つ、そう

言つ意味で言つたんじやないよつ……」

確かに、よくよく考えてみればどんなでもないことを口走つていたかも知れない。

途端に恥ずかしくなつて、私は顔を伏せた。火照る頬が、茹で蛸状態の自分を自覚させて、ますます恥ずかしくなる。……何をやつているんだろう、私は。

「…………」

氣まずい沈黙の中、並んで歩く一人。

その沈黙を打ち破つたのは、境守君だつた。

「……あの、さ。俺はお前のこと、ほんとに凄い奴だと思ってるんだぜ？　小器用に指先一つで何でも作つちまつてさ。何つーのが魔法の手、つて感じか」

そう、少し悩んで発せられた言葉に、思わず私は吹き出してしまつた。

その言葉が陳腐だつたからぢやない。似合わなかつたからでもない。

私はそれと同じ言葉を、前に聞いたことがあつたから。
何だかそれが酷く愉快で 気がつけば、自分のことなどどうでも良くなつてしまつていた。

「つ……つふふつ……あははつ……！ そつかつ、じーゆー」となんだねつ」

一人合点が行つて、けらけらと笑う私に、境守君は困り顔で頭をかく。

「……ま、吹つ切れたんなら何よりだけど……わ」

戸惑いながらそう呟く彼の姿が何だか可愛く見えて、私はますます愉快な気持ちになる。

そうか。例えばこんな所なのだ。何だか放つておけないよつな、世話を焼きたくなるような、不思議な愛おしさ。

でも、結局のところはそんなことなど関係なく、この一人は根っここのところで繋がつてゐるのだ 同じ言葉を、同じ相手に言つてしまつほどに。

何も疑問に思ひことなどない。彼と彼女が一緒にいることはじくじく自然なことで、余計な口を挟むのは野暮なのだ。

何故だか清々しい気分で、私はいつもより一步、境守君の側に歩み寄つてみる。

彼は驚いた風ではあつたけど、照れ隠しの仏頂面で、私を受け入れてくれた。

それは、悪くない気分だつた。

何の変哲もない、いつもの放課後。

でも、少しだけ、気分の良い午後。

その日、私は、境守起陽と言つ男の子の、少しだけ可愛いところを知つて 少しだけ、朝日奈ひなたと言つ女の子の子の気持ちを知つ

た。

【朱色優陽 アケイロユウヒ 閑話『エナイトモチ』終】

『チイサナネガイ』（前書き）

大岩遙香による独白記。

『朱色優陽 アケイロコウヒ』 2読み後にお読み頂ければ幸いで
す。

『トイサナネガイ』

すうと。

すうとすうと、おねえちゃんとおひこがいたり、おねえちゃんがいてくれたらな、
と思つてござした。

おひこさんとおかあさんは大好きだったけれど、でも、一人はお
じうとがいせがしくて、あまりこっしょこぼいらくなかったから。
だから、おねえちゃんとおひこちゃんがほしかった。やうしたら、
あつと、すうとぎゅうこんにいてくれたと思つかり。まるかのせば
こ、すうとこでくれたと思つかり。

せるかがびゅうきになつたのせ、せれこのとせです。おむねい、
穴があいてしまへびゅうきだと、おかあさんを壊つてござした。
なおつても、すぐこ『やこせつ』してしまこます。まるかは、そ
おゆく『たいしつ』なのだねうです。……せぬかは、よくわから
なかつたけれど。

「こやうこんをしたのせ、へやこのとせです。おかあさんとおひ
さんとこりしゅにいらなくななるのせかみしかつたけれど、ぎゅう
きをおおすためだからつとおかあさんがあつたので、まるかはやつ
かることにしました。

「こやうこんせいかつせあみしかつたけれど、でも、こやうこんし
ていつかげつからこしたこひです。まるかはおねえさんこひこまし
た。ながいかみの毛がきれいで、おむねがおつせいくて、あつこいび
じんなおねえさんです。

「こやいんしたばかりでれみしこから、おともだちになつてね」
つて、おねえさんは言こました。でも、まるかは「つづる」とて言

いました。

「だつてせむかせ、おねえちゃん、元気なやうでな
つてほしかったから。」

おねえちゃんは少しだけおどろいたようなおかねをしたけれど、す
ぐにややこしくわらっててくれました。「じゃあ、おねえちゃんのいも
うとになつてくれるかな?」つて、やつまつて、あたまをなでてく
れました。

さるかさうれしくて、こつぱにこつぱにこつぱをしました。こつぱ
いこつぱいわらつきました。こつぱにこつぱに、「おねえちゃん」つ
て言いました。

おねえちゃんは、こつもはるかといつしょにてくれます。おせ
なしをしてくれたり、あわんでくれたり、おぐさんをひねるをして
くれたりします。

でも、さるかがこびりたのしこのせ、『おみもの』をおわつ
てこるときです。

おみものつてす「こ」です。ただの一本の毛糸が、おねえちゃんの
手の中にひいるなものにかわってしまいます。

あみものゆき「こ」けれど、おねえちゃんもす「こ」です。

あみものゆき、おねえちゃんも、さるかねどりとおせりになつて
いました。

だけど、さるかがすきなのほれだけじやあつませ。もつとも
つと、すきなものがあります。

はるかは、おにこちゃんがだいすきです。

おにこちゃんは、かよつとだけじやあつます。かん
じふせんやおかあせんは、はじめ、少しだけにわがついていました。
でも、おねえちゃんが、「たつくんはやせこ子だよ」とて言つた

から、せぬかはにわくあつまへんでした。それよつも、かつゝこになつて思つました。

おにこちやんは、少しだけしゃべり方からさせうです。だけ、はるかのあみものをほめてくれます。するこ、つまこつて、こつぱいこつぱこつて、いります。

おにこちやんは、かつゝよくて、やわじくて、あつたかいです。おにこちやんのさわの上にこゑど、せぬかはうじくられしくなつます。たのしくなつます。でも、とれどもねむくなつたやうひとあります。ふしきです。

……おにこちやんがすきなきもひ、おねえちゃんがすきなきもわせ、なんだかちがうよつなきがします。おんなじ『すき』なのに、ふしきです。「せぬかも女の子ね」つておかあせんはわいついていたナビ、せぬかにせゆくわかつませんでした。

せぬかは、おねえちゃんとおにこちやんがだこすけです。ちがうやせひだなび、でも、おんなじくらこすけです。

だから、せぬかと、おねえちゃんと、おにこちやんと、すりとすりと、こつしょにいられたなつて思つます。

でも、おかあせんはいまつたよつなおかおで「あひとじゅうひこんにこねつむりなの?」つて言つてました。

やうでした。せぬかも、おねえちゃんも、びよしきをなおすために、こつしょにこゑどります。ずっとこつしょにこゑどには、びよしきがなおりてはダメなんです。でも、それはこけなことです。せやくげん物にならなことこさません。

びよしきがなゐるのせここじとです。うねじこじとです。せぬかのびよしきもだなび、おねえちゃんがげんきになつてくれれば、やれもつれしこです。

なのじ、少しだけわみしこれせぬかもつま。ふしきです。いのま

まじょつけがなおりなければこいのと、なんて思つてしまこまか。
はるかはいけない子です。

でも、それでも、ずっとこいつしょこいたいです。だいすきなおね
えちゃんど、おにこちやんと、こいつしょこ。

……ワガママな、いけない子です、はるかは。

……でも、それなり。

だれかがここからこなくなつてしまつ、そのとわまでは。どうか、
だいすきなおねえちゃんど、おにこちやんと、こいつしょこをせめて
ください。

すつと。

すつとすつと、ねねえちゃんどおにこちやんがこしてくれたらな、
と。はるかはいつも思つていました

【朱色】優陽 閑話2 『チイサナネガト』 終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7096m/>

『朱色優陽 アケイロユウヒ』 開話

2010年11月25日12時03分発行